

2022年11月30日

博士学位請求論文要旨

論文題目 一九九五年以降の村上春樹文学の変遷
ー 〈コミットメント〉と〈継承〉の相補性ー

提出者 山本智美（中央大学大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程5年）

論文の要旨

①論文の主題、当該研究分野における位置づけ

(1)論文の主題

一九九五年以降の村上春樹文学の変遷を、作中に表れる〈コミットメント〉を分析することで論じる。本論における〈コミットメント〉とは、幅広い概念の中で、特に主人公とそのペアになる異性との結びつきという、共時的かつ小さな関わり合いを指す。彼らが結ばれるには、各々が象徴的な親殺しという通過儀礼を果たす必要がある。孤独な過去との決別を意味し、精神的に独立することによって〈コミットメント〉は達成される。これは、以下に引用する、村上春樹のいう〈コミットメント〉と照応するものである。

村上 コミットメントというのは何かというと、人と人との関わり合いだと思うのだけれど、これまでにあるような、「あなたの言っていることはわかるわかる、じゃ、手をつなごう」というのではなくて、「井戸」を掘って掘って掘っていくと、そこでまったくつながるはずのない壁を越えてつながる、というコミットメントのありように、ぼくは非常に惹かれたのだと思うのです。¹

村上 主人公はいろいろな登場人物にコミットメントを迫られるのです。たとえば女の子、笠原メイさん、彼女にもコミットメントを迫られるし、それから……。

河合 加納クレタね、「クレタ島へ行こう」と言うでしょう。

村上 そうですね、それともうひとつ、間宮中尉、彼は自分の人生というものを託していこうとするんです。いろいろなかたちで、彼はコミットメントを迫られる。ただ奥さんのクミコさんだけが逃げていく。去っていく。でも、彼がほんとうにコミットしたいのは彼女なのです。

河合 あるいは、言いようによると、それまでコミットして来た人たちは、クミコさんにコミットするための通路のようなものだったのでしょか。

村上 物語のはじめでは、彼にはまだクミコにコミットする資格がないんですよ。井戸をくぐって行くことは、その資格を得るための、『魔笛』で言う試練みたいなものじゃないかとぼくは思ったんです。それは書き終えてから思ったことですが。²

井戸を掘るとは、個人の内面の探究を意味し、主人公たちがこれまで見て見ぬふりをしてきた孤独に気づくことである。試練とは、孤独と訣別するための象徴的な親殺しである。これらを経た上で〈コミットメント〉は果たされるのである。

作中に〈コミットメント〉が表れる一方で、もう一つの重要な概念である〈継承〉もまた表れる。〈継承〉とは、一九九五年以前から村上が抱いていた、人は誰もが暴力という負の遺産を引き継ぐ存在であるという認識を前提としている。暴力の引き継ぎという限定された関心から、引き継ぎという行為そのものといかに向き合うべきかという問いに拡大したものである。本論ではこれを〈継承〉と呼び、〈コミットメント〉と同様に村上文学を論じる上で重要な概念とみなす。〈継承〉は親世代から子世代への記憶や意思の引き継ぎ、換言すると、親世代と子世代との通時的なつながりを意味する。これは象徴的な親殺しを前提とする〈コミットメント〉が対象とし得ないつながりを補うものである。

同様に〈コミットメント〉もまた〈継承〉を補う働きがある。『騎士団長殺し』の私は、〈継承〉により必然性のない暴力を行使し、自身の影に追いつめられる。私を現実世界につなぎとめるものが、〈コミットメント〉による共時的なつながりである。

この二つの概念が、前景化、後景化しつつ、相補的に機能する。これが一九九五年以降の村上春樹文学の変遷である。

何故〈コミットメント〉と〈継承〉は、重要な概念たり得るのか。これらにいかなる意義があるのか。〈コミットメント〉と〈継承〉のどちらも、オウム真理教の信者たちが囚われていたものを乗り越えるための方法であるという点に意義がある。

本論では、オウム真理教の信者たちが囚われていたものを便宜的にオウムの要素と呼ぶ。村上は、オウム真理教の信者たちを以下のように解釈している。①「自分の存在の奥底のような部分に降りていく」作業を行うが、「そのような作業において、どこまで自分が主体的に最終的責任を引き受けるか」というと、「彼らは結局それをグルや教義に委ねてしまう」。³②「日本人というのは本当に自由を求めているのだろかって僕はときどき疑問に思ってしまうんですね。とくにオウムの人たちをインタビューしていると、それを実感しました。「みんな多かれ少なかれ「指示待ち」状態なんです。どっかから指示が来るのを待っている。指示がないというのは「自由な状態」ではなくて、彼らにとってはあくまで暫定的な状態なんです」。⁴③「オウムに入った人の話を聞くと、やはり育った家庭の環境に問題があったという人はけっこう多かったですね。両親から正常な愛情が幼い人格形成期に乱れていたというか、足りないというか、そういうケースが多かったような気がします」。⁵

以上をまとめると、オウムの要素とは、孤独な過去との訣別ができず、負うべき責任を教

祖という親なるものに委ねた、自由を求めないものと言える。〈コミットメント〉を果たす主人公たちが、象徴的な親殺しによって孤独な幼少期と訣別し、精神的に独立した存在となる過程を辿る必然性はここにある。村上は〈コミットメント〉によってオウム的要素を乗り越える物語を描いているのである。同じく〈継承〉は、自由とはいかなるものかを示す機能を持つ。引き継ぐべきものと向き合い、それに責任ある態度を示すところに本当の自由、主体性の獲得がある。オウム的要素を乗り越えるという意義を持つが故に、〈コミットメント〉と〈継承〉は一九九五年以降の村上文学で重要な概念足り得るのである。

(2) 当該研究分野における位置づけ

村上春樹文学における〈コミットメント〉は重要なテーマでありながら、論者によって用い方の異なる、恣意性の高いものである。黒古一夫は〈コミットメント〉に政治性を求め、それが表れていないと批判的な立場をとっている。

『ノルウェイの森』と『スプートニクの恋人』の終りの部分の違いをみれば、確かに村上春樹は一個の人間が生き続けるというようなことの意味を、他者との「共生」の関係で捉えようとし、それこそが襲いかかる理不尽な「暴力」に抗する「コミットメント」の仕方に他ならない、と考えたのである。しかし、この村上春樹の「コミットメント」に対する考え方は、「コミットメント」という言葉の本来の意味に照らして、正当だったのか。周知のように、サルトルらフランス実存主義哲学が盛んだった戦後によく使われるようになった「コミットメント」という言葉には、作家などの表現者が使う場合、それは単なる「かかわり合い」という意味以上の、主体的な「政治参加（仏語の「アンガージュマン」の意味）」をも含意するものであった。⁶

一方、加藤典洋は政治性よりも、個人間における結びつきという小さな形の〈コミットメント〉を『色彩をもたない多崎つくと、彼の巡礼の年』に見出し、以下のように論じる。

小説は、つくるがフィンランドで旧友のクロ（黒埜恵理）の「君は彼女を手に入れるべきだよ」という強い助言を手にとり、沙羅に、「君のことが心から好きだし、君をほしいと思っている」とこれまで誰にもあえていえなかった言葉を口に、最後、心細いまま、無防備のからだをさらして、沙羅の答えを待つ場面で終わる。(略) 他者への捨て身の呼びかけ、告白、贈与——一つの「小さな」コミットメント——が行われる場面が、この小説の終点なのである。⁷

本論では、一九九五年以降に書かれた長編小説を対象に、これまで曖昧なまま用いられてきた〈コミットメント〉がいかなるものかを考察する。これが本論の出発点である。

村上文学における〈コミットメント〉は過剰な期待を読者に抱かせるものであった。すな

わち、一九九五年一月の阪神淡路大震災と同年三月の地下鉄サリン事件を機に転換したという劇的な経緯⁸によって、〈コミットメント〉は甚大な被害を贖うことができる程、絶対的かつ包括的な概念であろう、そうでなくてはならないという幻想を読者が抱くことになった。それ故に〈コミットメント〉は論者の各々の期待が反映され、恣意性の高いまま用いられてきたのだろう。先に挙げた黒古の論考は、政治的な意味が十分に表れているであろう、そうでなくてはならないという期待が裏切られた結果だと解釈できる。坂上秋成は〈コミットメント〉を「語り直しによる倫理」と言い換えている。「それは「圧倒的な暴力」によって誕生してしまった汚れた物語を、別の物語を投入することで「浄化」する試みである」⁹と論じる。〈コミットメント〉は、オウム真理教の提出した「汚れた物語」を「浄化」し得る程、無垢なものであろう、そうでなくてはならないという期待を読み取ることができる。無意識的な期待が、「汚れた」オウム真理教と、無垢な村上文学という二項対立を強化してしまっている。「目じるしのない悪夢」で、二項対立の図式を推し進める報道に批判的な態度を示す村上¹⁰が、自作でこの図式を用いるとは考えにくい。

本論では、主人公とそのペアになる異性との共時的な結びつきという小さな〈コミットメント〉を抽出することで、過剰な期待というバイアスを排し、より客観的な目線から村上文学を論じる。

②論文の構成

(1)目次

序論	一九九五年以降の村上春樹文学の変遷
第一章	『スプートニクの恋人』論—〈コミットメント〉と通過儀礼としての暴力—
第二章	村上春樹文学に表れる〈継承〉の端緒
第三章	『海辺のカフカ』論—象徴的な母殺しと〈継承〉について—
第四章	『1Q84』における〈コミットメント〉の到達点と〈継承〉の可能性—
第五章	『騎士団長殺し』に表れる〈コミットメント〉と〈継承〉の相補性
結論	村上春樹文学における〈コミットメント〉と〈継承〉の相補性

(2)各章の概要

第一章では、『スプートニクの恋人』¹¹に表れる〈コミットメント〉と暴力性の関係を論じる。象徴的な母殺しを行うことで、主人公・ぼくとすみれは孤独な過去と訣別し、母子間の精神的な癒着から独立した個人として結びつくことができる。親なるものの殺害という通過儀礼を前提とした、主人公とそのパートナーとの結びつきが〈コミットメント〉である。

第二章では、〈継承〉という概念の成立について論じる。一九九五年以降の村上春樹は〈デタッチメント〉から〈コミットメント〉へ転換したと自認¹²しているが、それと同時に、人は誰しも暴力性という負の遺産を引き継いだ存在であるという認識を有している。『心臓

を貫かれて』を翻訳したことで、その認識が確固としたものとなり、『ねじまき鳥クロニクル 第三部』に表れることになる。暴力の引き継ぎという限定された関心が、引き継ぎそのものへの問題意識に拡大する。〈継承〉といかに向き合うべきかという問いに「トニー滝谷」¹³と「レキシントンの幽霊」¹⁴で挑んでいる。しかし、この段階では、問題の提示にとどまり、明確な答えの提出には至らない。

第三章では、〈継承〉といかに向き合うべきかという問いへの答えを『海辺のカフカ』¹⁵を通して提出したことを論じる。負の遺産を引き継ぐことになったとしても、人は〈継承〉から逃れることはできない。しかし、引き継いだものをそのまま反復するのではなく、主体的に生きるために〈継承〉を発展させることができる。これが村上春樹の提出した〈継承〉への態度である。さらに、〈継承〉が〈コミットメント〉の問題点を補うことを論じる。〈コミットメント〉のためには象徴的な母殺しという通過儀礼が必要であるが、これは自己のルーツの否定、自死へと向かう危険性を有している。母と交わる＝母殺しを行ったカフカ少年は、佐伯の意思を〈継承〉することで現実世界へ戻ることができる。

第四章では、象徴的な父殺しを前提とする〈コミットメント〉の問題点と、それを補う〈継承〉の萌芽が表れたことを『1Q84』¹⁶を分析することで論じる。象徴的な母殺しは、精神的な母子の癒着の切断を意味し、象徴的な父殺しは、既存の制度の乗り越えを意味する。しかし『1Q84』における父殺しは、本来の父殺しの意味を持たず、孤独の乗り越えという個人的な文脈の中でのみ機能する。ポストモダンにあっては父の乗り越えは制度の相対化にはなり得ないことを、村上は描き出したのである。個人的な文脈における象徴的な父殺しを行った青豆と天吾は再会し、二人で生きる選択をするが、それは二人を追うさきがけというシステムから逃げることを意味する。というよりも、象徴的な父殺しを前提とする〈コミットメント〉は、青豆と天吾に通時的なつながりから逃げることを要請する。〈コミットメント〉が切断してしまった通時的なつながりを保持するものが〈継承〉であり、それは天吾の父親から〈謎解き〉という形で求められる。物語の終わりで、それは後景化するが、『1Q84』には〈継承〉の萌芽、それを追求する可能性が表れている。これを引き継いだものが『騎士団長殺し』¹⁷である。

第五章では、『騎士団長殺し』を分析することで、〈コミットメント〉と〈継承〉の相補性を論じる。本作品の〈コミットメント〉は男女のペアを対象とするものではなく、主人公・私の日常性を回復するための他者とのつながりである。〈継承〉は、私が象徴的な父・雨田具彦の〈謎解き〉を行い、騎士団長の刺殺を〈代行〉することである。それは私にとって必然性のない暴力の行使を意味する。私は〈継承〉によって主体性を失い、他者の物語に同化させられる。これが〈継承〉の持つ問題点である。他者の物語に巻き込まれた私をつなぎとめるものが共時的なつながり、すなわち〈コミットメント〉である。〈継承〉も〈コミットメント〉も両義的なものであり、その危険な側面を補い合う、相補的なものである。

以上の物語分析を通して、村上春樹が〈コミットメント〉と〈継承〉を用いて、またはその相補性を用いて何に挑んでいるのかを考察し、これを結論とする。一九九五年以降の村上

文学は、一貫してオウム真理教の信者が囚われていたものを乗り越えようとしている。本論ではこれを便宜的にオウムの要素と呼ぶ。これを乗り越えるために、個人はいかに行動すべきかを自作で描いている。オウムの要素とは、教祖と信者のみが有するものではない。市井を生きる我々もまた有しているものである。それ故に、村上文学は我々読者の在り方をも問うものになっている。

③論文の独自性

本論における独自性は四点ある。

一点目は〈継承〉がいかなるものかを論じた点である。親から子への記憶の引き継ぎというテーマは、二〇二〇年四月に刊行された『猫を棄てる』¹⁸で顕在化した。『猫を棄てる』によって、何故このテーマが表れることになったのか、物語においてどのような機能を有するのかという疑問もまた浮上することになった。本論では、引き継ぎというテーマの端緒と、その機能を分析した。このテーマは単に辞書的な意味ではなく、人は誰もが暴力という負の遺産を引き継ぐ存在であるという認識を前提としたものだとして定義した。辞書的な意味と差別化を図るために、これを〈継承〉と呼び、〈コミットメント〉と共に村上春樹文学を語る上で欠くことのできない概念として論じたところに独自性がある。

二点目は、〈コミットメント〉と〈継承〉が、オウム真理教の信者たちが囚われていたものを乗り越えるために機能すると論じた点である。〈コミットメント〉と〈継承〉は、それぞれ異なるものとのつながりを対象にする。〈コミットメント〉は異性間の共時的なつながり、換言すると横軸のつながりを対象とする。このつながりを獲得することは、過去からの解放、主体性の回復を意味する。これは、オウム真理教の信者たちが囚われていた孤独な過去、教祖に主体性を委ね、自らの責任を放棄したことを踏まえ、それを乗り越えるための機能である。〈継承〉は親世代と子世代の通時的なつながり、換言すると縦軸のつながりを対象とする。このつながりを獲得することは、真の自由の希求を意味する。真の自由とは、引き継ぐべきものと向き合い、それに責任のある態度を示さない限り得られるものではない。〈継承〉もまた、教祖に自由を委ねた信者たちの在り方を問うものとなっている。方向性の異なるこの二つのつながりによって、閉塞的な状態からの脱却を試みていると論じた。

三点目は〈コミットメント〉を主人公とそのペアになる異性との共時的かつ、小さなつながりとした点である。〈コミットメント〉が小さなものであっても、オウムの要素の乗り越えという意義があることを示した。このことによって、〈コミットメント〉には、阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件という大きな被害を贖い得る概念であろうという過剰な期待があると指摘した。これには過剰な期待、幻想に基づいた、肯定か否定かという極端な評価を村上文学に下す現状を批判する意図がある。

四点目は、一九九五年以降の村上文学の変遷を、〈コミットメント〉と〈継承〉が前景化、後景化しつつ、相補的に機能するという図式を提出した点である。〈コミットメント〉と〈継

承〉はどちらも意義と問題点を有した、両義的なものである。換言すると、この二つの概念は、絶対的、包括的なものになり得ないということである。これを示すことで、先に論じたように、〈コミットメント〉への過剰な期待、それに基づく両極端な評価を揺るがすことが可能となる。

④今後の課題

〈コミットメント〉に対する過剰な期待は、村上春樹文学および〈コミットメント〉に、肯定か否定かという極端な評価を下すものであると論じた。この問題点をより深めていく必要がある。読者の過剰な期待は、作者・村上春樹との共犯関係によって成立したものであり、読者の読みが作者によって方向づけられている構造を指摘しない限り、村上文学をより客観的な目線で論じることは困難である。かねてから村上は自作への評価に対して、正面から向き合う姿勢よりも、むしろ謎を深めていくような姿勢を取っている。「自分のやりたいことの道筋がある程度見えてきたし、あとは自分で考えるしかやっぱらないんだなあ。だからもう、人に何を言われてもしょうがないなと思いますよ」。「僕は誰かを見失い、人は僕を見失う」¹⁹。この発言は、村上春樹の「やりたいこと」とは何かという疑問を生むものである。その答えを明示しないことで、自作の評価の攪乱、謎の敷衍という効果が生まれる。この言説を目にする読者は、自身の読みを省みると同時に、村上文学に過剰な期待・幻想を募らせることになる。それは、村上文学は無垢なもの、暴力性とは無縁なものという読解につながるのではないか。実際、『1Q84』の〈コミットメント〉は、牛河の殺害を前提としているにもかかわらず、天吾と青豆を「十歳の少年と十歳の少女」²⁰と語り、その無垢さを強調している。

作者による読みの方向づけ、特に〈コミットメント〉を無垢なものとして語る点に着目する。この方向づけによって、〈コミットメント〉に過剰な期待を読者が抱くことになる。この作者と読者の共犯関係の指摘を今後の課題とする。

(注)

- 1 村上春樹『村上春樹全作品 1990～2000⑦ 約束された場所で 村上春樹、河合隼雄に会いに行く』、講談社、二〇〇三年十一月、七〇頁から七一頁。初出は『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』、岩波書店、一九九六年一二月。
- 2 村上 前掲書（注1）と同じ、八五頁から八六頁。
- 3 村上春樹『全作品 1990～2000⑦ 約束された場所で 村上春樹、河合隼雄に会いに行く』、講談社、二〇〇三年十一月より引用、二一二頁から二一三頁。初出は『約束された場所で underground 2』、文芸春秋、一九九八年十一月。
- 4 村上 前掲書（注3）と同じ、二三一頁から二三二頁。
- 5 村上 前掲書（注3）と同じ、二二六頁から二二七頁。
- 6 黒古一夫『黒古一夫近現代作家論集 第3巻』、アーツアンドクラフツ、二〇一九年七月、一六八頁。初出は『村上春樹 「喪失」の物語から「転換」の物語へ』、勉誠出版、二〇〇七年一〇月。
- 7 加藤典洋『村上春樹は、むずかしい』（岩波新書（新赤版）1575）、岩波書店、二〇一五年一二月、二四五頁。
- 8 村上 前掲書（注1）で、村上春樹は「九五年はオウム事件と阪神の大地震がありました。あれはまさにコミットの問題ですよ」と発言している。二五四頁より引用。
- 9 坂上秋成「「浄化の物語」を願いながら三人称・コミットメント・反サプリメント」、「ユリイカ1月臨時増刊号第42巻第15号総特集☆村上春樹—『1Q84』へ至るまで、そしてこれから—」、新潮社二〇一〇年一二月、一四五頁。
- 10 村上春樹は以下のように発言している。「この事件を報道するにあたってのマスメディアの基本姿勢は、〈被害者＝無垢なるもの＝正義〉という「こちら側」と、〈加害者＝汚れたもの＝悪〉という「あちら側」を対立させることだった。「このような相互流通性を欠いたモーメントの行き着く先は、往々にして、煮詰められパターン化された論理であり、淀みがもたらす無感覚である」。(村上春樹『村上春樹全作品 1990～2000⑥ アンダーグラウンド』、講談社、二〇〇三年九月より引用。六四三頁。初出は『アンダーグラウンド』、講談社、一九九七年三月)。
- 11 村上春樹『スプートニクの恋人』、講談社、一九九九年四月。
- 12 村上 前掲書（注1）で、村上春樹は以下のように発言している。「『ねじまき鳥クロニクル』はぼくにとっては第三ステップなのです。まず、アフォーリズム、デタッチメントがあって、次に物語を語るという段階があって、やがて、それでも何か足りないというのが自分でもわかってきたんです。その部分で、コミットメントということが関わってくるんでしょね。「ぼくは地震のことについても、オウムのことについても、何かひとつの転換点、そういうものとして非常に興味を持っているのです」。二九一頁から二九二頁。
- 13 村上春樹「トニー滝谷」のショート・バージョンの初出は「文藝春秋」第六八巻第七号、一九九一年七月。ロング・バージョンの初出は『村上春樹全作品 1979～1989⑧』、講談社、一九九一年七月。後に『レキシントンの幽霊』、文藝春秋、一九九六年一月に収録された。
- 14 村上春樹「レキシントンの幽霊」のショート・バージョンの初出は「群像」第五一卷

第一〇号、一九九六年一〇月。ロング・バージョンの初出は『レキシントンの幽霊』、文藝春秋、一九九六年十一月。

¹⁵ 村上春樹『海辺のカフカ』、新潮社、二〇〇二年九月。

¹⁶ 村上春樹『1Q84 BOOK1』、『1Q84 BOOK2』、新潮社、二〇〇九年五月。『1Q84 BOOK3』、新潮社、二〇一〇年四月。

¹⁷ 村上春樹『騎士団長殺し』、講談社、二〇一七年二月。

¹⁸ 村上春樹『猫を棄てる 父親について語るとき』、文藝春秋、二〇二〇年四月、二四〇頁から二六七頁。初出は村上春樹「自らのルーツを初めて綴った 猫を棄てる 父親について語るときに僕の語ること」、「文藝春秋」第九七巻第六号、二〇一九年六月。

¹⁹ 村上春樹「『海辺のカフカ』を中心に」『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです 村上春樹インタビュー集 1997-2009』、文藝春秋、二〇一〇年九月、一二四頁。初出は「海辺のカフカを語る」、「文學界」第五七巻第四号、二〇〇三年四月。

²⁰ 村上春樹『1Q84 BOOK3』、新潮社、二〇一〇年四月、五五一頁。